

立冬を過ぎて、紅葉の季節を迎えました。体調を崩されている兄弟姉妹が多いです。寒さに身体が慣れて、生活に力を取り戻されることをお祈りしています。

今朝の箇所の思い出

2011年に東日本大震災が起きた時、翌週の礼拝で、主の救いと希望を語ることに、大きな辛さを覚えました。その時の聖書が、今朝の並行記事であるマルコ福音書のバルティマイの箇所でした。主に叫び求める祈りは、必ず神に聞き届けられると、振り絞る思いで語り、祈りました。

2015年7月には、友人の牧師の依頼で、同志社のチャペルアワーで奨励の機会が与えられました。初対面の未信者たちの大学生を前に、どんなメッセージを届けることが相応しいだろうかと思い巡らした末に、選んだのは今朝の箇所でした。「ステイ・ハングリー、ステイ・フリーッシュ」というアップル・コンピューターの創設者スティーブ・ジョブスの名言と、同志社の創立者である新島襄の当時の常識を遥かに超えた大きなビジョンを紹介しながら、人に笑われない道より、人に笑われる道を歩こう、神様は道を必ず開かれるから、とエールを送りました。

一生分の叫び

さて、今朝は「障がい者と共に在る主日礼拝」です。再びこの箇所と向き合う機会を与えられて、改めてここに示されている深い意味に心が留まりました。それは、イエス様が示される、燃えるような熱い神の愛です。エルサレムで待ち受けるイエス様の受難と十字架の死によって、この世界に与えられる大きな恵みが、このエリコの城門の道端で、「ひな形」として表されているのです。

このエリコ町の近くの道端は、まさしく「障がい者と共に在る」場所でした。そこに住む人々にとって、当たり前風景だったでしょう。しかし、物乞いの盲人にとって、それは決して本人の納得した暮らしではありませんでした。この時、いわゆる予定調和を破って、彼は主イエスに「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください！」と叫びました。彼の一生分の叫び、「本来の自分に戻るチャンス」を信じたのです。障がい者は、決して「叱りつけ、黙らせる存在」ではありません。その人が、神を賛美し、喜びで満たされる時、周りの人々は、その人を通して、心が開かれ、この世界がどれほど恵みに満ちているかということを知るようになるのです。

人は大人になってから、人前で叫ぶという機会は、あまりないでしょう。しかし、心の叫びが無いと言われてれば、決してそんなことはありません。つまり、目の前の人に本当に向き合っていないのかもしれないかもしれません。しかし主は、「共に在る」と宣言されます。十字架の姿に、熱い思いをぶつければ、救ってくださるお方なのです。